ヘミングウェイゆかりの地を訪ねて

高野泰志

第6回　コブレ編（つづき）

前回はついに本題に入る前に紙面が尽きてしまうというみっともないことになってしまいましたが，今回はその続きです。黄金のマリア像とサンフランシスコ・デ・パウラのフィンカ・ビヒアをレポートします。

4. マリアさま

コブレの協会は周囲を見下ろす小高い丘の上にあります。車が近づくにつれて徐々に賑やかになってきます。お供え物の花輪や人形を売る露店があちこちにできていて，人通りが多く，非常に賑やかです。タクシーの窓から眺めていると，たまたまなのか，よくある光景なのか，男の人が血を流しながら殴り合いのけんかをしています。周りの人は騒ぐこともなく，当たり前のような顔をして歩いています。さすが情熱の国は血の気が多いのでしょうか……？

徐々に教会に近づいてくると，ハバナで見た重厚な教会建築とはまったく違って，パステルカラーの明るい色合いの建物であることが非常に印象的でした。タクシーは教会の正面には止まらず，そのまま建物を迂回して裏側に。

正面玄関は礼拝用で，観光客はだいたい裏側から中に入るようになっているようです。入ったところにまずはキリスト像が。これも金色だったのですが，ハバナ旧市街の純ヨーロッパ風の教会と違って，コブレの協会はキューバ独自の文化という感じがします。キリスト像の周りには多くの一般の人々や有名人が教会に寄付した品物が陳列されています。かつてはヘミングウェイのノーベル賞メダルもここに陳列されていたのでしょうか。

fig.1 教会裏側

一通り見て回って次は階段を上がって一つ上のフロアに。いよいよここがマリア像の置かれてある場所でした。最初にこの像を見たときに思ったのは，意外に小さい，ということでした。もっと大きくて派手なものを期待していたのですが，顔などは遠目にはほとんど分かりませんでした。このマリア像はなかなかユニークで，ミサの行われている間は教会の正面玄関を向いているのですが，それ以外の時間は観光客用に180度回転して裏口を向いているのです。ですので裏口から入った我々の方に，ちゃんとその姿を見せてくれているわけです。

1606年に3人の漁師が難破し，海を漂っていたとき，漂ってきた木片にすがりついて何とか命からがら助かりました。そしてその

とき，しがみついていた木片をよく見てみると，聖母マリアの像だったのです。漁師たちは命を助けてくれたその像をコブレにまつることにした，というのがこの教会の由来です。それ以来，漁師の守り神であり，キューバの人々にとって最も大切な聖地であり続けているのです。革命以後キリスト教が迫害を受ける中で，ここだけは大切な信仰の中心として人々の心の中に残り続けたのですね。

fig.2 マリア像

多くの人々の信仰を集める教会ですから，教会裏には宿泊施設があり，遠方からお参りに来た人々が泊まれるようになっているそうです。ほんの少ししか滞在しませんでしたが，なんだか名残惜しい気持ちを残してコブレの協会を後にしました。

フィンカ・ビヒアや，ヘミングウェイが定宿にしていたハバナ旧市街のホテル・アンボス・ムンドスや，ヘミングウェイの通ったバーなど，キューバについて書きたいことはまだまだたくさんあるのですが，それはまたの機会に。

fig.3 正面玄関から

fig.4 左手が教会側面，正面に見えるのが宿泊施設